分析レポート

地域経済金融

地方創生の拠点として期待される「道の駅」④

～まちの駅、海の駅との「3 駅連携構想」を進める福井県小浜市～

木村　俊文

要旨

福井県小浜市にある道の駅「若狭おばま」は、舞鶴若狭自動車道の「小浜インターチェンジ（IC）」近くに立地し、情報提供施設のほか、産業振興のための物販施設および農林水産物の体験加工施設で構成される。

小浜市では、観光を軸とした産業振興を目指して、IC 近くにある「道の駅」を市の玄関口と位置づけ、主要観光施設が集まる「海の駅」、中心部にあるまち歩きの拠点「まちの駅」と、3 駅を連携することにより、市内での滞在時間の延長を図る「3 駅連携構想」を進めている。

はじめに

地方創生の観点から「道の駅」に対する期待が高まっている。国土交通省では、地域活性化の拠点となる先駆的な取組みを重点「道の駅」として選定し、総合的に支援している。

本稿では、2015 年度の重点「道の駅」38 ヶ所の 1 つに選定された、福井県小浜市にある「若狭おばま」の取組みを同市の観光戦略に触れながら紹介する。

3 駅連携構想による観光戦略

小浜市は、全国に先駆けて 2001 年 9 月に「食のまちづくり条例」を制定し、2003 年 9 月には当地の伝統・食文化を伝えるための博物館「御食国若狭おばま食文化館」を開設するなど、国の食育基本法（2005 年制定）よりも早い段階から食育や食文化を推進してきた自治体である。

その後も、食と産業・観光とを結びつけることで地域活性化をめざす「食のまちづくり」に取組み、最近では 2015～16 年の 2 度にわたって観光庁の「地域資源を活用した観光地魅力創造事業」に「若

図表 1　小浜市中心部

（資料）ESRI Japanデータ（公共地図）より作成　(c) ESRI Japan

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます

写真１　海の駅の中心施設「御食国若狭おばま食文化館」

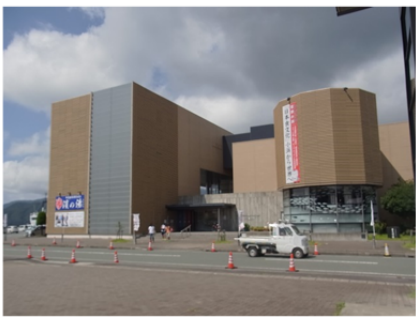

写真２　明治期の芝居小屋を中心とした「まちの駅」

狭湾の食と伝統的町並みを生かした小浜市の地域活性化」が選定された。

小浜市では現在、2010 年の「中心市街地活性化基本計画」などに基づき、舞鶴若狭自動車道の「小浜インターチェンジ（IC)」近くに立地する「道の駅」を市の玄関口と位置付け、「海の駅」「まちの駅」と市内の観光 3 拠点を連携することにより、市内での滞在時間の延長を図る「3 駅連携構想」を進めている。

3 駅のうち、「海の駅」は、前出の「御食国若狭おばま食文化館」を中心に、地元漁港で水揚げされた鮮魚や海産加工品等を販売する「若狭小浜お魚センター」のほか、遊覧船乗り場や海鮮レストラン、土産物コーナー等を備えた「若狭フィッシャーマンズ・ワーフ」（2015 年 9 月改修・リニューアルオープン）など 10 余りの目玉施設が集中する、重要な観光拠点となっている。

また、「まちの駅」（2016 年 5 月開設）は、重要伝統的建造物群保存地区に指定された古い町並みが残る市街地への周遊を促進するために、明治時代の芝居小屋を復原した「旭座」（小浜市指定文化財）を中心に、観光情報や特産品等販売施設から成るまち歩きの拠点である。

以下では、「道の駅」の運営会社の概要および「道の駅」の特徴を紹介する。

おばま観光局の概要

株式会社まちづくり小浜・おばま観光局（以下、観光局）は、小浜市のほか、商工会議所や観光協会、農協、漁協、森林組合、地元金融機関など 10 団体が出資して、2010 年 4 月に設立された第 3 セクターである。同社は、2008 年に就任した現松崎市長が公約の目玉に掲げていたもので、行政だけでなく官民一体となった小浜市の新たな観光推進組織として設立された。

観光局の現在の事業は、市の指定管理者として「道の駅」および海の駅エリアにあるレストラン「濱の四季」を運営するほか、フィッシャーマンズ・ワーフ内に観光コンシェルジュを配置して週末に実施する観光案内・相談対応、各種イベントの企画やパンフレット作成、観光情報の発信、観光まちづくり・産業振興など地元経済の発展に資する企画・調査など、営利（収益）事業だけでなく非営利（公益）事業も担っている。

観光局では、3 駅連携構想を推進するために、3 駅の相談窓口（観光コンシェルジュ）に寄せられた問合せ内容を収集するなどして観光客の消費行動を分析するとともに、3 駅周遊スタンプラリーなど多様なイベントを実施している。

一方、観光局は 2016 年 2 月、REVIC（地域経済活性化支援機構）と福井銀行が共

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載･複製を禁じます

同で出資する「ふくい観光活性化ファンド」から投融資を受けた。同ファンドは、景勝地として知られる越前海岸やものづくりの鯖江など県内で 4 つの観光ゾーンを設定し、それらの周遊を図ることで観光消費の拡大を目指すものであり、小浜市がパイロット地域となっている。

観光局の従業員数は現在、社員 6 メイ、パートタイマー25 名のほか、REVIC から常勤で 2 名が出向している。REVIC は状況に応じて豊富な経験・ノウハウを持つ専門家を観光局に派遣・出向させ、経営改善を支援している。例えば、前出のレストラン「濱の四季」は、もともと市直営だったものを 2015 年 4 月から観光局が運営しているが、REVIC からの専門家による支援を受け、メニューの刷新やコスト管理を実施したことにより、短期間で黒字に転換した。また、道の駅には同様に物販の専門家が派遣され、定期的に講習会を開催するなどして売り場レイアウトや陳列を改善し、売上アップを実現した。

道の駅のおもな特徴

2011 年 3 月にオープンした道の駅「若狭おばま」は、情報提供・トイレ・休憩施設（24 時間利用可能）のほか、産業振興のための「物販施設」および地場産農林水産物の体験加工室・調理実習室・会議室等から成る施設「四季菜館」で構成

【地域の概要】

小浜市は、福井県の南西部、若狭地方の中央に位置し、北は若狭湾とその内湾である小浜湾に面する。当地は古くから志摩や淡路とともに御食国（みけつくに＝海産物を皇室・朝廷に送った地域）として京都との結びつきが強い。若狭ぐじ（アマダイ）や若狭カレイ、小鯛のささ漬けなどは今でも京都で珍重される食品となっているが、これらはかつて鯖とともに鯖街道（2016 年 5 月、日本遺産認定）を通って当地から運ばれていた。

また、小浜湾に囲まれた海は、年間を通じて穏やかであり、夕日の名所としても知られる。農産物では、隣接する若狭町と並んで「うめ」が特産品となっている。さらに、市内には伝統的な町並みをはじめ、塗箸生産量日本一を誇る若狭塗等の伝統工芸品、国宝や国指定の重要文化財を含む約 130 の社寺仏閣などがあり、歴史・文化的にも豊富な観光資源が存在する。

ただし、直近の人口は 3.0 万人と 1951 年の 3.8 万人をピークに減少傾向が続いている。国立社会保障・人口問題研究所による人口推計では、2060 年の小浜市の人口は 1.8 万人にまで減少することが見込まれているが、同市の人口ビジョンでは 2060 年の目指すべき人口規模を 2.7 万人と設定している。

図表 2　小浜市の位置

（資料）ESRI Japanデータ（公共地図）より作成

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます

されている。

このうち、情報提供施設には、観光案内パンフレットだけでなく、3駅連携構想を推進する一環として、「海の駅」「まちの駅」の各駅に設置されたライブカメラにより他駅の生中継動画を見ることができるほか、道路情報やイベント情報、観光案内などの情報を伝える各種モニターが設置されている。また、情報提供施設には、地元高齢者によるボランティア観光ガイド1名が日中常駐し、地元情報や周辺観光施設の案内を行っている。

一方、物販施設内にあるフードコーナーは、客単価を600～700円と低額に抑えたメニュー構成となっている。前述のとおり、道の駅には市内各所、とくに「海の駅」方面に観光客を誘導する「玄関口」としての役割があることから、小浜名物の「鯛カツ」や「サバ＆ポテト」のほか、アイスクリームなど、あえて軽食の提供にとどめている。

写真3 道の駅「若狭おばま」外観

また、物販施設内の地場産品販売コーナーには、新鮮野菜のほか、特産品である鯖のしょうゆ干・焼き鯖・へしこ・小鯛のささ漬け等の水産加工品などが並んでいる。なかでも野菜・果物・花きなどの生鮮青果物は、JA若狭の農産物直売所「若狭ふれあい市場」（道の駅から1.5kmほどの距離）に出荷する地元生産者が大多数を占めるが、出荷者の中には、当地にＩターン就農した若手農業者グループなども含まれている。近い距離に2つの農産物直売所が立地するが、地元住民を対象とするＪＡ直売所と違って、道の駅は市外の観光客を主対象としていることから、競合することなく共存できている。

なお、道の駅では「チャレンジコーナー」を設けており、売れるようになれば定番商品として棚割りするような試みも実施している。

このほか、駐車場を使ってフリーマーケットや朝市を定期的に開催するほか、四季菜館では講師を招いて当地の発酵食文化を体験する料理教室を開くなど、食育や地域活性化の観点から

図表3 道の駅「若狭おばま」の概要

所在地	福井県小浜市和久里24-45-2
開設	2011年3月12日
交通	舞鶴若狭自動車道「小浜IC」より小浜上中線を西へ300m、JR小浜線「小浜駅」からは2.5km
総事業費	約5億円
敷地面積	8,500㎡
駐車場	バス・大型車7台、普通車76台、身障者用4台
情報提供施設	各種情報モニターや掲示板などを通じて観光・道路・地域情報（イベント等）を提供、ボランティア観光ガイドが常駐
地域振興施設	物販施設（新鮮野菜、特産品・土産等）、フードコーナー、農林水産物の体験加工施設（調理実習室）等
その他の施設	授乳室、公衆電話、無線LAN
管理・運営	株式会社まちづくり小浜（小浜市のほか、商工会や観光協会、農協、漁協、森林組合、地元金融機関など10団体が出資して2010年4月に設立した第3セクター）が市の指定管理者として管理運営
雇用者数	計33名（うちパート25名）
周辺の名所	明通寺（国宝）など多数の神社仏閣、蘇洞門、鯖街道資料館
名産	「若狭ぐじ＝アマダイ」「若狭カレイ」「若狭ふぐ」、小鯛のささ漬け、焼き鯖、鯖寿司、若狭塗（塗箸生産量は全国1位）など

（資料）パンフレットやウェブサイト等から作成

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます

さまざまなイベントを開催している。

6 次産業化への取組み

道の駅では、特産の「梅」を使った梅干や梅ジャム、梅コンポート（甘露煮）といった加工品を販売している。これらは、ＪＡの生産者組織である「小浜梅生産部会」と観光局が 6 次産業化に向けて 2010 年から連携し、開発したものである。

また、道の駅では、「若狭ふぐ」のブランド振興のために市内の酒造会社と観光局が共同開発した「若狭ふぐひれ酒」（地酒 180ml・焼ひれ 1 枚付）も販売している。2012 年発売の同商品は、インターネット経由で購入することもできるが、今では道の駅だけでも年間 4,000 本を販売するほどの人気商品となっている。

さらに、道の駅では、隣接する市民農園の空きスペースを活用して、いちじくやブルーベリーなどを栽培し、それらの果実を加工して、フードコーナーでソフトクリームのトッピング用ソースに使うなどしている。ちなみに、この市民農園は道の駅開設と同時に利用が開始されたものであり、観光局が市から管理運営を受託して貸付主体となっている。現在は全体 30 アールのうち、10 アール 60 区画（1 区画 15 ㎡）が市民に利用されている。

道の駅での新たな展開

小浜市では、高速道路 IC に隣接している道の駅の立地を活かして、西紀サービスエリア（SA、兵庫県篠山市）から北陸自動車道の南条 SA（福井県南越前町）または賤ヶ岳（しずがたけ）SA（滋賀県長浜市）まで 150km 以上にわたって SA 空白区間となっていることに着目し、市全体を SA ととらえ、ゆとりと多様性あるサー

写真 4 道の駅内「野菜直売コーナー」

写真 5 JA生産部会と開発した「梅ジャム」

写真 6 「若狭ふぐ」のブランド化推進で開発された商品

ビスを地域全体で提供しようとする「SSA（スローサービスエリア）構想」を打ち出し、市内へ誘導する方策を検討している。

すでに 2014 年に社会実験を実施し、①約 7 割が高速道路を降りてガソリンスタンドを利用する意向であること、②約 8 割が高速 IC 近くに道の駅など休憩施設があれば立ち寄りたいと回答していること、③最寄りパーキングエリアでの PR 活動が効果的であったことなどが明らかとなっている(注)。

一方、道の駅のバスターミナル機能を拡張して、京都・大阪とのバス便を充実

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます

させ、パーク＆ライド（道の駅に自家用車を駐車してバスを利用）を推進することにより、交通結節点としての機能強化を図ることも進めている。

（注）小浜市産業部都市整備課（2015）「舞鶴若狭自動車道と道の駅を活用した社会実験について」『道路行政セミナー』5月号

当面の課題と方向性

道の駅の物販施設には、年間10万人ほどの買物客が訪れ、売上高は年間約 1.5億円に達する。ただし、夏場の売上は月額2千万円前後に伸びるものの、冬場は6～7 百万円に落ち込むなど季節変動が激しい。夏はシーカヤックなど海辺の遊びで訪れる人が増える一方、冬は降雪のため道路事情が悪化するほか、温泉施設が少ないこともあり、客足が鈍ることによるものである。そこで、観光局では冬の味覚「若狭ふぐ」を楽しめるツアーイベントなどを企画している。

一方、将来的には次世代の観光客をいかに育てるかが課題となっている。道の駅のアンケート結果によれば、小浜市を訪問する主な観光客像は、①50～60 代、②夫婦、③発地は関西圏、④リピーター、⑤魚を食べることが目的であることが判明している。つまり、1970 年代の海水浴ブームを支えた世代であり、かつて小浜に来て魚がおいしかったということを体験的に記憶している「関西のシニア層」が現在のコア顧客となっている。当面はこの層をメインターゲットとするものの、それらの子供世代は小浜に来ることが少なく、当地への理解度も世代間で断絶した状態にあるといえる。

そこで、こうした世代間断絶を緩和・解消するために、関西圏の次世代・次々世代に向けて、効果的なＰＲ活動を積極的に展開する予定である。

また、訪日外国人旅行者の受入対応も課題の一つとなっている。小浜への外国人旅行者はアジアを中心に年間数千人程度（全体に占める割合は1%未満）と少ないものの、市では観光業者向け英会話教室の開催や多言語対応の「指差し会話シート」の作成・配布などに取組んでおり、観光局としても外国人旅行者の誘致に向けて今後マーケティング活動を進める考えである。

まとめ

以上のとおり、道の駅「若狭おばま」は、市の観光戦略の中で玄関口として位置づけられ、その運営を担う観光局は市内周遊を促進するための各種イベントの企画・実行・情報発信のほか、多様な関係者を巻き込んで 6 次産業化にも取組むなど、観光による地域活性化を推進している。

当地での取組みは、①古き良き生活習慣や伝統文化を大切にしながら、観光資源や立地環境の強みを活かして、まちづくりを実践していること、②観光を軸とした産業振興の観点から道の駅を機能させていること、③都市と地方をつなぐ過程で地域内連携を強めていること、などの点で意義深い事例と評価できる。

道の駅など3駅の今後の展開とともに、地域としての「小浜」ブランドが確立されていくことを強く期待したい。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます